

「メディアと日系人の生活研究会」の報告にあたって

河原典史

「メディアと日系人の生活研究会」は、2013・14年度に立命館国際言語文化研究所の重点研究に採択された。この研究会は、おもに関西地域で活動する日本人（日系）移民研究者で組織されるマイグレーション研究会とも協力し、日本人移民をめぐるメディアと、それによって育まれる日本人観に関するテーマで共同研究を行ってきた。本特集は、2年間における研究会の成果の一部である。

共同研究者の1人である名古屋大学准教授・日比嘉高氏は、移民研究においてメディアを取り上げる意義を次のように説明している。メディアは人々の生活の幅広い側面に密接に関わり、人々の移動にともなって運ばれ、創られるものである。また同時に、それは人々の経験を運び、伝え、変容させるものでもある。たとえば19世紀末、日本人移民は活字を運び、移住地で日本語新聞を創刊した。その新聞は現地や故国で起こった種々の出来事をコミュニティの内外に伝達し、そのことによってコミュニティ自身の性格や評価を変えたのである。

一方、日比氏は、メディアが人々に呼びかけ、移民を創出してきたことも指摘する。日本人移民はコミュニティのため、あるいは居住国と故国の人々をつなぐためメディアを創り、維持する。メディアは過去における移民の経験を、現在の我々の元へ届ける。その場合に重要なのは、メディアを単なる「乗物」のように考えないことだと、日比氏は唱える。メディアは単なる伝達の道具ではなく、伝達作業そのものによって社会を変え、それに載せられる内容の意味も変容させる。メディアのもつ造形力や伝達のプロセスに留意することが大切なのである。

このように提示する日比氏は、共同研究の対象とするメディアは新聞や雑誌をおもに想定しているが、必ずしもそれに限定しないことも指摘する。レコードや映画、聞き取り調査に用いられるテープレコーダーやICレコーダーなど種々の記録、すなわち再生媒体や手紙や電話、インターネット（電子メール、動画のアーカイブやデータベースなど）などのコミュニケーション装置などを幅広く含むものが、今回の共同研究で用いるメディアの概念である。

このような準備を経て、関西地域を中心に若手研究者への参加を呼びかけた。その結果、立命館大学だけでなく、大学院生を中心とする新進気鋭の移民研究者が集まった。2013年度には隔月に開催された研究会でテーマや計画の検討、特に2014年3月8・9日に名古屋大学での合宿報告会が行われた。このような経緯をふまえて、2014年度には5月に阪南大学、7月に京都女子大学、10月に大阪商業大学、12月に同志社大学での発表会が開催された。また、2013年10月には、東洋大学社会学部教授・水野剛也先生の「日系アメリカ人と（の）マス・メディア、ジャーナリズム研究—「日本人」研究者が開拓すべき「大きなすき間」—」、14年10月には駒澤大学教授・白水繁彦先生の「「エスニシティとメディア」研究 昨日・今日・明日」と題した

メディア研究の最前線が講演された。なお、2015年3月7・8日には愛媛大学で合宿研究会が開催された。

このような共同研究の進展のなか、その中間報告として本号には6本の論文を収めることができた。本研究会は今後も継続され、本号に収録されなかった論文も収めて、その成果は2015年度に論文集の出版を予定している。この特集を編むにあたって、ご指導をいただければ幸いである。